

“My School” in 2030	
Orbis / Cosmopolitan	
学校のミッションステイトメント・理念	子供/大人、先進国/途上国の壁にとらわれず、人間には自らの意志で世界を変えていく力がある。世界全体を繋ぐ学校間のネットワーク、Orbisに属し、様々な視点の衝突/共存を生徒は実感する。世界を構成しているその一員としての意識が生まれ、世界を尊び、そして変えて行く力と意識を備えた人間の育成を理念とする。
2030年、世界が抱える多くの課題の中で、この学校が解決目指す課題は・・・	<ol style="list-style-type: none"> 1. 多文化家庭・移民・国境を越えた移動の増加によって、複数の国や複数の文化のもとで生活する人が増加し、様々なバックグラウンドを持つ人々が混在する社会となる。しかし、教育がそのような多様な社会に適応できていないこと、言語の壁、他文化に対する理解不足という原因により、新しい環境で生活する際に、以前から住む人と新しく環境に入る人との生活に格差が生じることやうまく打ち解けることができないこと 2. 必要とされる仕事のスキルの変化に対応することがますます難しくなる。ICT及びテクノロジーの進化に伴い、産業のオートメーション化が進む。それによって例えばアメリカでは現在存立している仕事の47%がなくなると言われている。特にサービス業は、オートメーション化の影響を受けやすく、将来なくなることが予想される産業である。このように労働集約型産業から知識集約型産業に変化するため、柔軟に適応していく力は現在の教育で身に付きにくい。 3. 世界的に賃金・所得に不平等が生じており、教育機会の均等が実現されていない。そのため、生活が困難な人、自分の持つ能力を十分に発揮できない人がいる。また、世界のある場所ではすでに解決されている課題が別の場所では解決できないため困難に直面している人もいる。
上記の課題を解決できる人材育成のため、この学校が開発を狙うスキル・能力は・・・	<ol style="list-style-type: none"> 1. (Orbis 選択科目や世界中の人々との World Meeting Week を通じた交流、World Database の活用により、) 社会的マインオリティや発展途上国を含む様々な民族、国籍の人を理解し、尊重する。世界の一員として社会問題に取り組む姿勢とそれを可能にする豊富な知識。母国語以外にも英語、現地語などを学び円滑なコミュニケーションを図る。 2. (WMW を主体的に企画することで) そのときにはない新しいものを企画する力・想像力 (リサーチ授業・ディスカッションを通してことによって) 問題についての確に捉え、解決方法を思考し続ける力 (WMW を生徒主体で運営すること・国際機関に提案すること) inventive な姿勢と考えたことを行動・実行する能力 (ディスカッションやディベートで) 他者の考えや、得た知識を整理し、それらを踏まえた自分の考えを他者に伝える能力 (将来の職業について考える夢教育より) 将来の社会について 考え・分析しそこでの自分の将来像をイメージした上で学ぶこと 3. (自由な科目選択・ICT 教育の実現により自分の習熟度にあったものを好きな時間に学ぶことで) 個人のもつ能力の最大限の開発 (世界中の様々な人との交流・フィールドワークによる) 一見自分とかけ離れた問題に対して主体的にとらえる力 (ワールドカンファレンスにてさまざまな立場からの解決方法を考え、国際機関への実際の解決方法を提案することによる) 実際に行動し、課題を解決する力

To effectively run this school...	
学校システムは・・・	<p>この学校では「Orbis」を導入する。「Orbis:ラテン語で地球の意」は、世界中の学校を繋ぎ地球規模の教育コミュニティを作り出すシステムである。この教育は基本的に、世界中の学校に「Orbis」を提案し、導入していただくことで実現する。それにより、生徒は広い交流を持つことができ、世界中のここで学びたい様々な人の出会いの場を作り出す。</p> <div style="display: flex; align-items: center;"> <div style="flex: 1;"> <pre> graph TD A[総会] --- B[Orbis事務局] B --- C[Aブロック会] B --- D[Bブロック会] B --- E[Cブロック会] B --- F[Dブロック会] </pre> </div> <div style="flex: 1; padding-left: 20px;"> <p>Orbis システムは、左図のような組織をもつ。これらは Orbis 校を統括するものではあるが、干渉はシステムを円滑に運用するための最低限のもので、学校運用に関する方針の多くについては各校の意志が尊重される。Orbis 事務局とは、本システムの運営主体となるもので、システムの運用の事務的作業 (World Database, Human Mobility などの調整) を行う。事務局を構成する事務員は、Orbis システムを導入する学校の</p> <p>の教員から、地域ごとに数人ずつ各地域の学校数と生徒数を考慮して選出され、それを一定期間でローテーションする。また、Orbis システムに関するあらゆる事柄は総会・ブロック会の2つ場で議論される。ブロック会は、ある一定領域の学校の集合体である。開催頻度については各ブロックに委ねられるが、総会の前後には必ず行われる。総会前には、総会に向けてブロックに所属する各校の意見が総括される。総会後は、総会での決定事項に基づいて各ブロック内の方針などを定める。総会には各ブロック会議長校 (各ブロックより選出・一定の任期) が参加する。ブロック会議長校からは教職員と生徒から各一名ずつ出席し、各ブロック内の意見を代表して持ち込む。そして、それに基づいて Orbis システム全体に共通する、原則 (Orbis 憲章) や目標など、システム運用のために欠かせない事柄について議論し、策定する。</p> <p>システムの内容は、ICT を積極的に利用した 1. World Database, 2. Human Mobility, 3. 独自のカリキュラムの3つである。1. World Database とは、Orbis のオンラインコミュニティである。それは自由にアクセスできるアーカイブとして各 Orbis 導入校で行われた講義の録画や、テキストブック、レポートなど生徒の制作物を保存する。また、自らの考えや地域の課題を世界に発信することもできる。ICT を利用して反転授業を行うことや、3D のバーチャルな交流空間をつくり出し世界中の Orbis 校との交流を促進する場としての役割も担う。</p> <p>2. Human Mobility は、生徒・教師を一つの学校内にとどめておかず、異なった環境で学び、教えることを奨励するものである。それにより生徒・教師は多様な文化、社会に触れ、実際にさまざまな環境を自らの体で体験することとなる。また、相互的に行</p> </div> </div>

	<p>うことで自校にいながらも様々な国から訪れる生徒や教師がともに学び、教えることができる。異なる教育文化の衝突から、教師とともに生徒も新しい教育のあり方をシステム内で模索し続ける。</p> <p>3.Orbis 内の学校に適用する独自の degree システムをベースに授業が展開される。生徒は、一定の教育水準を確保するために設置された数学、物理学、社会系科目、体育等の必修科目を受講した後、法学、経済学、農学などの豊富な選択科目を自らの興味に応じて履修する。講義形式/ディスカッション形式等の多種多様な授業に加え、それを踏まえて生徒に実際に行動させるために学校が提案する様々なプログラムがカリキュラムを構成するため、学科試験に加え、授業への貢献度、実社会でのアクションなどさまざまな評価基準のもと卒業に必要な単位が取得できる。</p> <p>Orbis は「学校は在校生だけのものではなく、学びたい人すべてのもの」という概念のもと、生涯学習を可能にする。卒業生をはじめ、学生だけでなく学びたい人は World Database へのアクセスやその他プログラムへの参加が可能であり、学生は彼ら/彼女らから学ぶことができるため、国境を越えるだけでなく、年齢にとらわれない相互的な教育関係の実現も図れる。発展途上国でも、大使館や国際機関のオフィスを活用することで、学校がない地域や学校に通えない人も ICT を通じて Orbis にオブザーバーとして参加することができる。また、各国の学習指導要領の違いなど、経済的/立地的障壁から上記の degree システムに基づくカリキュラムを限られた範囲でしか提供できない Orbis 校も、ICT を活用して Orbis 内の教育格差を埋めることができ、ネットワークへの参加が可能である。それと同時に UNESCO などの国際機関やグローバル企業に Orbis 校の生徒が働きかけることで発展途上国の政府にインフラ整備を促し、参加者が増加し、組織が進化し続けることを目指す。</p>
授業形態は・・・	<p>レクチャー形式の授業に加え、World Database を用いて必修科目+Orbis 選択科目の幅広い授業が展開される。必修科目では社会系の分野融合科目や数学・理科融合科目、習熟度別の現地語、英語などの言語教育、リサーチや発表を重視するプロジェクト学習、未来社会とそこにいる自分の将来像をイメージする夢教育などが組み込まれる。Orbis 選択科目はそれぞれの興味関心に応じて積極的に展開される。</p> <p>必修科目・Orbis 選択科目で得た知識、問題意識の延長線上に、年に2回 Orbis 校を中心として、World Meeting Week(WMW) という世界規模の祭典を実施する。各校の代表数名が参加するその週間は、親睦を深めるためにスポーツ/文化交流からなる前夜祭(具体的には World Athletic/Cultural Fest. の開催)で始まり、総まとめとして生徒国際会議を行う。国際会議では、Orbis 選択科目でカバーされた地球上の幅広い問題に対して、世界中の Orbis 校/Orbis オブザーバーから集う有志で様々な分野の議題を設定して討論し、課題を共有し、解決策を導くことを目指す。生徒国際会議において、各分野を専門としている方々(国際機関のアナリスト、大学生)にも事前に議案書と解決草案を送付し、その場でフィードバックを受け、その上で案をまとめる。さらに、国際機関(UN,OECD)で実際に発表する機会を設け、更なるフィードバックを受けて最終解決案を作成し国際機関の正式な草案として活用してもらう。多岐にわたる世界の課題に自らかかわることをとおして、自らの考えや主張で実際に世界を変えることができる意識を生徒は得る。</p> <p>また、この WMW の開催は WMWC(World Meeting Week Council) という生徒主体の組織のもとで運営される。WMWC の活動を円滑に行うため、下部組織として委員会を組織する。World Athletic Fest./国際文化祭などを企画・調整する Athletic 委員会/Culture 委員会、国際会議開催の調整などを行う Assembly 調整委員会、WMW 開催時に発生している自然災害、紛争などに対する募金活動を行う Endowment 委員会、開催用の資金及び途上国の WMW の参加を広めるための資金調達・調整を行う WMW 財務委員会を設ける。</p> <p>このように授業からの能動的展開を目指すカリキュラムが組み込まれている。</p>
教え方・学習方法は・・・	<p>1.Input Stage/2.Utilize Stage という二段階の教育体制をとる。</p> <p>1.Input Stage では、レクチャー形式の授業とセルフラーニングを行う。まず、学校に登校して授業を受けるレクチャー形式の授業では、自校の教師に加え、Human Mobility による各国の様々な考えを持つ教師が講義を行う。次にセルフラーニングは World Database を活用し、学校だけでなく自宅などでも受講するというものである。レクチャー形式の授業でセルフラーニングを前提とした授業を行うことで限られたレクチャーの時間を効果的に使う事ができ、Orbis 導入校の講義録画や教科書の利用で生徒は自校の授業だけでは学べないことも学ぶことができる。それによって生徒はより濃密な知識を得ることができる。また、セルフラーニングにより生徒は自らの関心・習熟度に合わせて自由に学びをすすめられる。</p> <p>2.Utilize Stage では、1.Input Stage で得た知識を活用する。生徒国際会議に向けての全校カンファレンスを行い、Orbis 導入校と ICT を利用したディベートやディスカッションを頻繁に実施する。習ったことを知識として留めておくのではなく、自らが自分の考えを持ち、発信・共有する機会を与える。また、フィールドワークも多く取り入れる。実際に目にするにより生徒は 1. Input Stage で得た知識をより身近に感じ、主体的に捉えられる。例えば、Human Mobility による派遣先でのプロジェクト活動などだ。時間的、あるいは経済的な障壁によりフィールドワークに参加できない生徒も ICT によってフィールドワークのリアルタイム中継、または World Database 上の録画を通して擬似的な体験ができる。</p>
経営(収入源、経験(現物)など含む)	<p>Orbis のネットワークの拡大は、必ずしも新規の学校を建設する必要はなく、既存の学校に Orbis システムを導入することによっても実現される。各校の運営は原則としてそれぞれに行われるが、GDP 等の経済指標をもとに判断される豊かな地域の学校が、システムへの参加が難しい途上国の学校を経済的に援助する分担金制度をとる。先進国へのメリットは、途上国の参加により Orbis システムが拡大し、それが先進国だけでできない多様な学びを可能にすることだ。また、分担金制度に加え、貧困/紛争等により、教育を十分に受けることのできない人々への奨学金を協賛企業から募り、ネットワーク内での教育機会の均等を目指す。</p>
参考にした資料・文献	<ul style="list-style-type: none"> ・ <i>My school, Our future, Schooling for 2030</i> ・ Carl Benedikt Frey and Michael A. Osborne (2013), <i>The Future of Employment: How Susceptible Are Jobs to Computerisation?</i> Oxford Martin School ・ OECD(2014) <i>Measuring Innovation in Education: A New Perspective, Educational Research and Innovation, OECD Publishing</i>

